

断章 旭川のアイヌ語地名研究

54

高橋 基

前回は、明治二十四年の永田方正と昭和三十五年の知里真志保のアイヌ語地名記載方法を紹介した。永田も知里も、川下から川上に向かって地名を記載するのは共通しているが、異なる点は、知里は、『左』とあるのはアイヌ流の考え方に従って『川上に向かって左(註・右岸)』をさし、『右』は『川上に向かって右(註・左岸)』の意味である』としたことである。

さて、安政四年(一八五七年)、カムイコタンに到着した松浦武四郎は、丸木舟を漕ぎ案内をしてくれたニホンテとアイランケの二人に、これから歩くシキウシバ(荷物背負場)からハルシナイまでの約三キロの間の地名を聞き、手持ちの野帳(フィールドノート)に書き付けた。それが、掲載写真の①『巳第二番』の当該部分である。対照

しやすいように番号を付し、見えない部分も補足して、以下に記述する(②の地図も参照下さい)。

(1)シキウシバ…荷物背負場、荷負通る也

(2)ホロレフシへ…川中大岩有

(3)ホンノミントルマイ…右

(4)ホロミントルマイ…右

(5)ヲナエルシ

(6)テシヤヲマナイ…右

(7)サヌシヒリ

(8)ルイカルシ…右

(9)テシヤ…大滝也

(10)テシヤヲマナイ…左

旭川のカムイコタン⑪



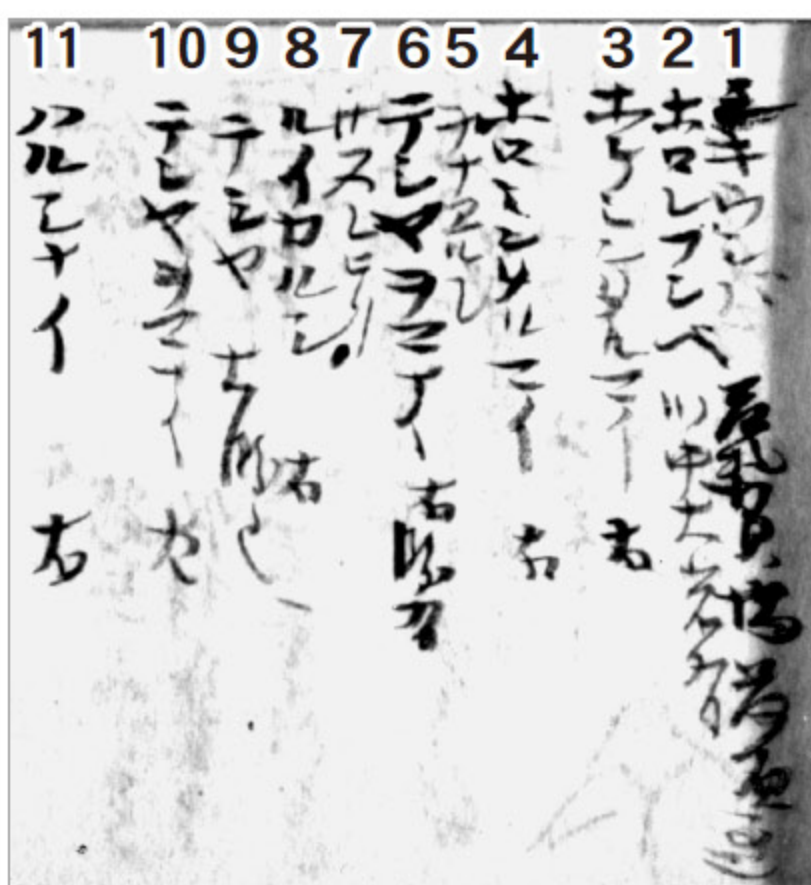
②『東西蝦夷山川地理取調図』

現・神居古潭



(11)ハルシナイ…右
シキウシバよりハルシナイ迄をカモイコタンと云也。ニホンテ、アイランケ申口

右のように、この記載法は、知里のいう、「アイヌ流の考え方」によって書かれていることが明瞭である。また、



①『巳第二番』シキウシバ～ハルシナイ

野帳には、地名を教えてくださいました人(インフォーマント)の名前を「ニホンテ、アイランケ申口」のように必ず記述している。松浦武四郎は、この野帳を基に報文日誌の「再篙石狩日誌」を完成するが、これには、先の「ニホンテ、アイランケ申口」の部分は省かれている。

他方、松浦はまた、野帳を基に川筋ごとの地名帳の『川筋取調図』や『川々取調帳』を作成し、安政六年(一八五九年)にそれらを基にして、『東西蝦夷山

川地理取調図』二十八枚を完成する。この地図は、伊能忠敬実測図の中図を基にしたもので、縮尺は二十二万六千分の一で、木版三色刷りである。

右の二十八枚の最初の「首」二枚にわたり、前記のニホンテやアイランケなど松浦武四郎を案内したり地名調査に協力してくれたアイヌの人たち二百七十九人の名前を記載して、松浦武四郎は感謝の意を表している。石狩国上川郡では、首長のクーチンコロ以下十九人が記載されている。このように案内者や協力者の名前が記載されている地図は、地図の世界では類例がないといわれている。松浦武四郎のアイヌの人たちへの深い思いを知ることができるのである。

さて、掲載図の②は、写真①の野帳の当該部分であるが、これまで見てきたポロレプシペが、右岸に「ホロレプシベ」と誤って記載されている。これは、『川々取調帳』に右岸に誤って記され、この地図にも誤りのまま写され、それが、明治二十四年の永田方正の地名解にまで誤ったまま引き継がれてしまった典型的な例である。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します